

大 原 遺 跡 1

—大原地区治山ダム建設に伴う調査—

平成20(2008)年

太宰府市教育委員会

序

本書は、地域防災対策総合治山事業における治山ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書です。

調査地は太宰府天満宮の北方、四王寺山東麓の谷部に位置する大字太宰府にあり、宇美町から太宰府の市街地に入る道筋に位置します。

今回の調査では杉の造林や常緑樹の自然林に囲まれた中に、近世以降の石垣を伴う段造成が確認され、この地域の開墾の歴史を知る上で貴重な成果を得ることができました。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、ひいては文化財愛護の精神が高揚することを心から願っております。

最後になりましたが、本調査に対しご理解ご協力いただきました関係各位ならびに諸機関の方々に心からお礼申し上げます。

平成 20 年 3 月
太宰府市教育委員会
教育長 關 敏治

例 言

1. 本書は太宰府市大字太宰府字大原で計画された地域防災対策総合治山事業における治山ダム建設に伴って実施した大原遺跡第2次調査の発掘調査報告書である。
2. 表土剥ぎの一部は、(有)松田造園土木に委託した。
3. 遺構の実測には、国土調査法第II座標系を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限りG.N.(座標北)を示し、本文中に記される遺構の角度もこれを基準としたものである。
4. 遺構の実測及び写真撮影は全て宮崎が行った。
5. 現況地形図作成および基準点測量は、(株)写測エンジニアリングに委託した。
6. 遺物の実測は、久味木理恵、宮崎が行った。
7. 図の浄書は、全て宮崎が行った。
8. 本書に用いた分類は以下のとおり。
土器・・・『大宰府条坊跡II』(太宰府市の文化財第7集)1983
9. 執筆および編集は、宮崎が担当した。

目 次

| | |
|-------------|----|
| 1、遺跡の位置と歴史 | 3 |
| 2、調査経過と調査体制 | 3 |
| 3、調査および整理方法 | 4 |
| 4、調査報告 | |
| (1) 調査地の現況 | 7 |
| (2) 検出遺構 | 8 |
| (3) 出土遺物 | 16 |
| 5、総括 | 19 |



- | | | | |
|------------|-----------------|-----------|---------------------|
| 1. 大野城跡 | 10. 水城跡 | 19. 原口遺跡 | 28. 剣塚遺跡 |
| 2. 岩屋城跡 | 11. 大宰府政庁跡 | 20. 篠振遺跡 | 29. 唐人塚遺跡 |
| 3. 陣ノ尾遺跡 | 12. 観世音寺 | 21. 前田遺跡 | 30. 峯・峯畑遺跡 (●は峯火葬墓) |
| 4. 筑前国分寺跡 | 13. 遠賀団印出土地 | 22. 宮ノ本遺跡 | 31. 太宰府天満宮(安楽寺跡) |
| 5. 辻遺跡 | 14. 大宰府条坊跡(破線内) | 23. 雛川遺跡 | 32. 浦城跡 |
| 6. 国分松本遺跡 | 15. 君畑遺跡 | 24. フケ遺跡 | 33. 原遺跡 |
| 7. 筑前国分尼寺跡 | 16. 般若寺跡 | 25. 尾崎遺跡 | 34. 京ノ尾遺跡 |
| 8. 国分千足町遺跡 | 17. 市ノ上遺跡 | 26. 脇道遺跡 | 35. カヤノ遺跡 |
| 9. 御笠団印出土地 | 18. 神ノ前窯跡 | 27. 殿城戸遺跡 | 36. 大原遺跡第2次調査(報告地点) |

Fig. 1 太宰府市とその周辺の遺跡 (1/30000)



- | | | |
|--------------------|------------------|----------|
| 1. 大原遺跡第2次調査（報告地点） | 7. 御手洗不動尊 | 13. 庚申尊天 |
| 2. 大原遺跡第1次調査 | 8. 大行事塔・五穀神 | 14. 山の神 |
| 3. 清水地藏堂 | 9. 大師堂 | 15. 秋葉神社 |
| 4. 秋葉神社の常夜燈 | 10. 一丁坂道路拡張工事記念碑 | 16. 淡島様 |
| 5. 県道開通記念碑 | 11. 猿田彦大神 | 17. 持国天 |
| 6. 大師堂・弁財天 | 12. 十一面観音像 | 18. 大野城跡 |

Fig.2 調査地周辺文化財位置図 (1/7500)

1、遺跡の位置と歴史

太宰府市は、北に四王寺山、北東に宝満山、南に背振山地東端の天拝山に囲まれ、さながら盆地的な様相を示している。これらの山々が途切れている北西に福岡平野が、南東に筑後平野が広がっている。二つの平野に挟まれた狭い平地を古代には官道が、現代では鉄道や高速道路が通り抜け、今も昔も交通の要衝となっている。宝満山と四王寺山の間には、宝満山を源とする御笠川が流れ、宰府の町や大宰府政庁前面を通り、博多湾へと注ぎ込んでいく。

太宰府市の北側には大城山（四王寺山）が構え、標高 410m の頂点に尾根線が馬蹄形に巡る。天智天皇 4(665) 年に大野城が築造され、この尾根線に土塁が巡り、それに囲まれた盆地状の内部には 70 棟ほどの建物跡が見つかっている。近年の災害による復旧事業によって、新たな城門の発見が相次いでいる。この山には宝亀 5(774) 年に四王院が創建され、四王寺山の 4ヶ所に仏像を分けて配置したと考えられ、現在も各所に地名が残り、毘沙門天跡には小堂が建てられ、信仰の対象になっている。最も東で今回の調査地に近い大原山は持国天跡といわれている。

四王寺山の南東麓には、天安 2(858) 年創建と伝える原山無量寺があつて、菅原道真の葬儀をあずかった寺として知られ、中世には、一遍上人が修行を行い、足利尊氏も入山している。この寺には八つの坊があり、一般に原八坊と言われ、古図には諸堂が立ち並び、かつての繁栄振りを見ることができる。

松川集落と宰府の町の間位置する大原地区について、江戸時代の地誌類にみることはなく、1806 年に作製されたという『太宰府旧蹟全図北』でも大原・松川地区ともに目立った記載はない。明治初年の『福岡縣地理全誌』に、宰府村に属する大原に 1 戸の民家があることが記されている。この大原地区の北側に位置する松川地区が江戸時代中期から開拓が始まったといわれ、天保の頃から入植が始まったとみられる。大原地区は松川集落ほどの集落は形成されなかったものの、土地の開墾については松川地区同様に江戸時代後半頃には行われたと推測される。

周辺の発掘調査としては、今回の調査地の東方、御笠川の東岸田地で、大原遺跡第 1 次調査が行われ、僅かに土坑やピットが検出され、縄文時代晩期の浅鉢や龍泉窯系青磁 II-b 類等が少量の遺物が出土し、縄文時代の生活圏であったことが窺える。

2、調査経過と調査体制

調査地は太宰府市大字太宰府 493、494、495、497-1、498-1 で、497-1 は、試掘調査結果、遺構が確認できなかったため調査対象から削除した。

2006 年 4 月 19 日、福岡県農林事務所森林土木課と平成 18 年度の地域防災対策総合治山事業に伴う事前協議が行われた。2006 年 5 月 26 日、現地を確認した所、今回の調査地については平場が多く確認され、治山ダム本体部設置予定地には坊跡が展開している可能性が高いと判断した。工事用通路にも坊跡及び墓が点在している可能性が高いため、まずは試掘調査などをする旨を福岡県農林事務所へ話をす。2006 年 6 月 1 日、南端付近の試掘調査を行い、南側の谷部（497-1）については遺構や遺物は確認できなかったが、段造成や石垣、礎石や中世墓らしき集石が確認できた。2006 年 6 月 7 日、現場で福岡県農林事務所と県文化財保護係を含めて市の文化財課、産業交通課と合わせて協議を行い、平成 18 年の計画は中止となった。2007 年 4 月 17 日、福岡県農林事務所、太宰府市産業交通課、文化財課で再度協議し、平成 19 年度事業としてやることが決まる。その後、伐採や現場進入に関する協議を重ね、調査を開始するに至った。

調査地まで車両が入る道路がなく、調査期間中、現場までの立ち入り等に関し、筑紫台高校の全面的な協力を得ることができ、聞き取り調査等では地権者の田中勝美氏にも協力を得た。この場で感謝の意を表したい。

開発対象面積は 13855㎡、調査面積は 1040㎡である。試掘調査・踏査は高橋学・山村信榮が行い、発掘調査は 2007（平成 19）年 9 月 10 日～12 月 25 日に実施した。発掘調査・実測・写真撮影は宮崎亮一が行った。

（平成 19 / 2007 年度）・・・発掘調査および報告書作成

| | | | | | |
|----|--------|---------------|------|------|------|
| 総括 | 教育長 | 關 敏治 | | | |
| 庶務 | 教育部長 | 松永栄人（～9月30日） | | | |
| | | 松田幸夫（10月1日～） | | | |
| | 文化財課長 | 齋藤廣之 | | | |
| | 保護活用係長 | 久保山元信（～9月30日） | | | |
| | | 菊武良一（10月1日～） | | | |
| | 調査係長 | 永尾彰朗 | | | |
| | 主任主査 | 吉原慎一 | | | |
| | | 齋藤実貴男 | | | |
| 調査 | 主任主査 | 城戸康利 | | | |
| | | 山村信榮 | | | |
| | | 中島恒次郎 | | | |
| | 技術主査 | 井上信正 | | | |
| | 主任技師 | 高橋 学 | | | |
| | | 宮崎亮一（調査担当） | | | |
| | 技師（嘱託） | 柳 智子 | 下高大輔 | 大塚正樹 | 端野晋平 |

3、調査および整理方法

調査および整理方法については、『佐野地区遺跡群 I』（太宰府市の文化財第 14 集 1989）、『太宰府市における埋蔵文化財調査指針』（太宰府市教育委員会 2001 年 9 月改訂）に基づいている。

最初に調査部分の樹木・竹林の伐採を行った。一部杉林については調査の進行具合によって、伐採の可否を判断することとし、調査を行うこととなった。事前の踏査で段造成が確認できていたため、航空測量と地上での補足測量を行い、現況地形の記録を行った。

発掘調査は、腐葉土を除去しながら、地上に露出していた礫と腐葉土との関係を確認し、最近の枯葉などに載っている礫はこの段階で除去した。調査地の地形や遺構・遺物の出土状況から判断し、段造成や露出する大岩などで調査区を A～I 区に分け、遺物の取り上げなどを行った。

調査を進める中で、段造成に伴う石垣等は確認できたが、全体的にピット等は確認できなかったため、全体図の記録は 1/100 の縮尺で平板測量を行い、石積みなどの主要遺構は 1/20 の縮尺で記録した。G・H 区の杉林については、遺構密度から調査に支障がなかったため、伐採を行わず調査を進めた。

また、調査区外に続く石垣は、調査区内のみ発掘調査を行い、調査区外の石垣については実測作業のみ行った。



Fig. 3 大原遺跡第2次調査全体図 (1/500)

4、調査報告

(1) 調査地の現況

調査地周辺状況は、段造成の西側を川が南に向かって流れている。南から栗畑や果樹林、真竹林、その上は広葉樹林と杉や檜の造林で、調査区の西側は杉の造林で、調査区およびその東側が幹周1～2mのツブラジイの大木を優占種にクスノキが所々みられる。そして、イチイガシが1本みられ、所々にイチイガシの幼木が生育し、林床にナンテン、サカキ、ヒイラギ、イヌビワ、クサキなどがみられる。戦後くらいまではマツも合間に生えていたという。また、調査中にはイノシシの姿を見かけ、夜間には調査区内を行動している痕跡を残していた。ツブラジイの枯れ木にキツツキが穴を開ける姿が確認できるという自然豊かな環境であった。ツブラジイ林の林床には所々に花崗岩が見え隠れしている。

調査直前の調査地は、A区とB区の半分は真竹林に覆われ、B区の西半分は下草がある程度で花崗岩礫が露出していた。C・D区は大木が殆どなく、巨石が2個その中央に露出している。E・F区は石垣と途切れた東側に坂道が続いている。G区は最も広い平坦地で昭和30年代に植えられた杉林になっている。H区は花崗岩礫が広く点在している。I区は狭く、中央付近に花崗岩礫が集中している。そして、その北側に続く山の斜面には花崗岩礫が斜面を埋めているが、露頭を見ることはできない。西側の川は、常時ちよろちよろと水が流れる沢であるが、2003年の豪雨によって、川底は岩盤が露出するまで下がり、東岸も大きく抉られ、段造成の石垣や里道の一部が消滅し、E～G区への入り口も消滅している。

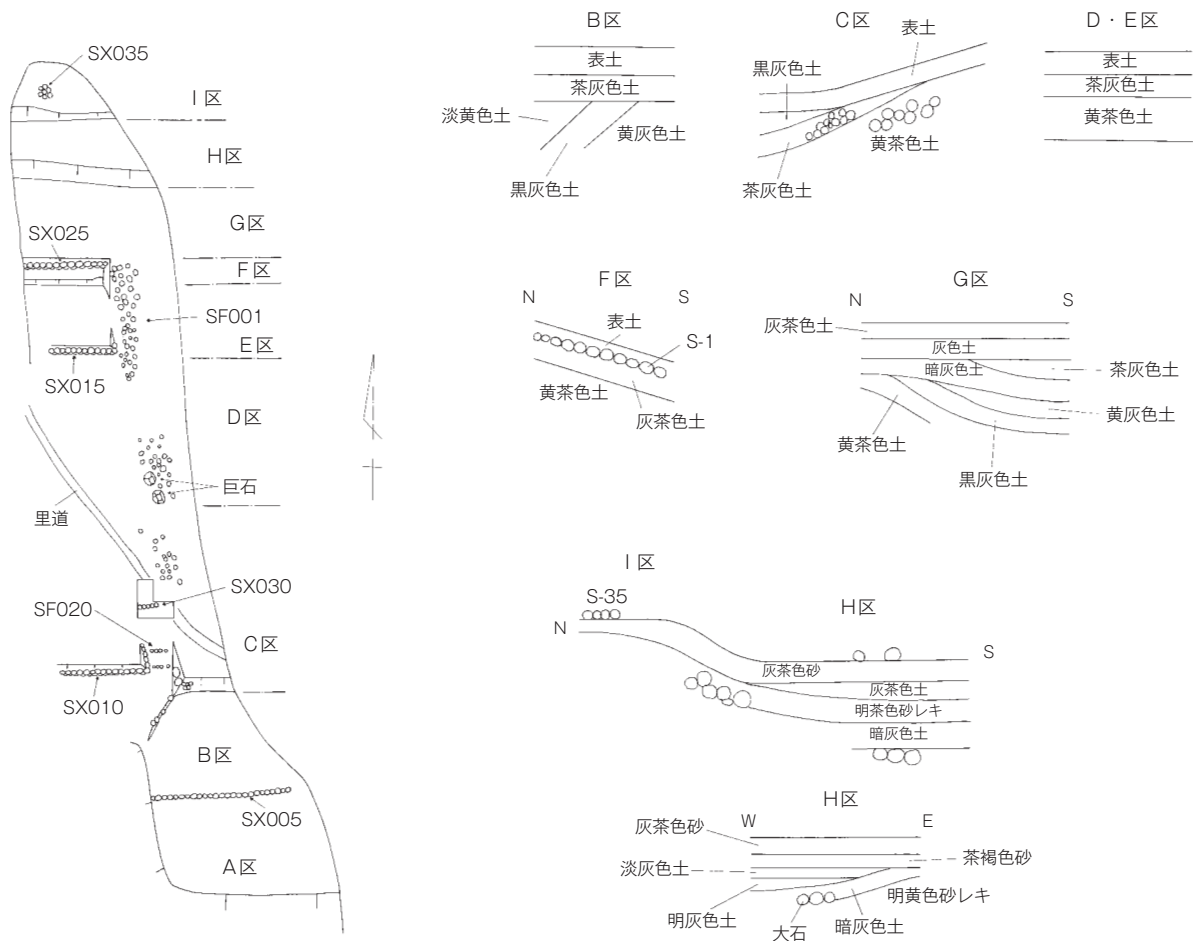


Fig. 4 調査地略測図

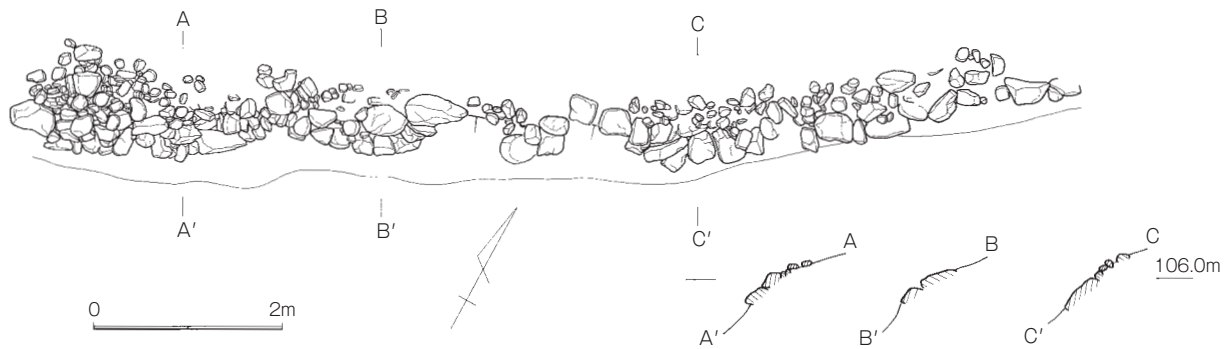


Fig. 5 SX005 遺構実測図 (1/80)

(2) 検出遺構

A 区 (Pla. 2)

調査直前は、真竹林が高密度で繁茂し、西側が若干雑木林になっていた。伐採後に花崗岩礫が見られたが、すべて浮いた状態で、上面やSX005の崩落石と考えられる。現状は平坦であったが表土を除去すると、若干凸凹で南に向かって僅かに下がっている。南側は大きな落差があるが、石垣は確認できない。ここは、B区同様に昭和40年代頃に造成し、造り出された平坦地である。

B 区 (Pla. 3)

B区は平坦ではなく、南北の高低差は2.5mもあり、また、多量の花崗岩礫を含む黄茶色土が薄い表土直下に広がっており、田畑としての利用は不適な土壌である。隣の地権者の話によると昭和40年代頃にブルドーザーで造成した箇所で、造成前は北側の里道と同じ高さであったといい、1.7m程削平されている。その後やはり耕作地の利用することは少なかったようである。

これらA・B区の造成土は、A区の南側段下に運ばれ、現在平坦地を形成している。

石積み

SX005 (Fig. 5, Pla. 2)

調査前から露出していたB区の南側法面にある石積みである。高さ0.5～0.9mで、東に向かって段差は低くなっていく。検出長11.3mで、東側の調査区外に続き、段差含めて自然消滅している。造りとしては段部分の土砂崩落を簡単に留める程度のもので、石の面は全く揃えてなく、裏込め石と呼べるものは殆どなく、目地には土砂があまり流入していない状態で、今回の調査地の中で、最も簡素な作りであり、この地で最も新しい石垣と考えられる。

C・D区 (Pla. 7)

C・D区の調査対象地は平坦面というより東側丘陵の裾部分に位置し、北側および東に向かって高い傾斜面である。途中で花崗岩の巨石の露頭が2個あり、ここを境にC・D区に分けて調査を行った。調査対象地と西側平坦面とでは、地番が異なり、地権者も異なっているため、現在の土地利用も西側がスギの造林、東側が自然林となっている。そのため、この部分で通路痕跡が確認される可能性があったが、調査の結果、人為的な造作を伴った積極的な通路痕跡は確認できなかった。しかし、北側のSX015近くでは石敷きが確認できた。これはSF001として後述する。表土直下は茶灰色土と黄茶色土の大きく2層からなり、両者とも多量の礫が含まれ、上位からの崩落土であることが理解できる。茶灰色土は近世以降で、黄茶色土は奈良時代の層と推測される。

また、この地区を里道が斜めに横切っている。幅1～2mほどで、現状でも平坦面や窪みとして確認



Fig. 6 SX010・SF020 遺構実測図 (1/80)

できる。この里道は南東の集落へと続いている。

石垣

SX010 (Fig. 6, Pla. 3～5)

調査前から露出していた石垣だが、半分近くは地中に埋もれていた。L字形の石垣で角部の上部は崩壊している。東西方向の石垣は、長さ 11.2m、高さ 0.8m で、部分的に 0.5m を超える大石があるものの、0.2m 前後の花崗岩礫を中心にほぼ垂直に積まれている。西端は石積みが低くなって自然消滅状態になっている。南北方向の石垣は、調査前は最上段の石が見える程度で、殆ど埋まった状態であった。検出長 3.45m、高さ 0.55～0.6m を測る。南半分が 0.5m 前後の大石で、北半分が 0.2m 前後の石を積み上げている。石垣の裏側には 0.2m 前後の花崗岩礫が多く見られるため、裏込め石と考えられるが、同様の礫混じり土は周辺に多い環境のため、積極的に裏込め石とも言いがたい。

SX030 (Fig. 7, Pla. 6)

C 区で見られた黒灰色土にトレンチを設定し、現地盤から 0.8m ほど掘り下がった所で確認した石列で、8 個の花崗岩礫が並び、検出長 1.5m、高さ 0.17～0.25m で、1～2 段分が残る。

通路遺構

SF020 (Fig. 6, Pla. 3)

SX010 と花崗岩の巨石の露頭との間に設けられた通路。調査前は土砂でかなり覆われた状態であった。通路部分の長さ 6.6m、幅は南端で 2.3m、北端で 1.7m を測る。通路上には花崗岩礫が点在しているが、その中に約 1.4m 間隔で、3ヶ所に大石が並んでいる。明確なものではないが意図的に段を造り、大石を置いたと推測される。この通路は南端からやや南西側に向き変え、下段の平坦地へ向かっている。

E 区 (Pla. 7)

南側を SX015 の石垣が設けている。平坦地は現在杉林になっているが、戦後すぐ位までは水田であった。調査対象地は SX015 の石垣より東側部分で、南北方向の傾斜面になっていて礫も多くみられる。

石垣

SX015 (Fig. 7, Pla. 7)

調査前から露出していた石垣で、明瞭に確認できたのは 7m ほどで、それより西側にも続くとみられるが、現状では段差があるだけで、石列は殆ど露出してない。高さは 0.6m で、東端は角のある大石を 2 段積んでいる。

通路遺構

SF001 (Fig. 8, Pla. 7～9)

SX015・025 の石垣が途切れた東側の傾斜面に見られる通行痕跡で、D 区の北端付近から F 区の SX025 にかけての斜面に残る。検出長は 15.8m、幅 1.5m 前後である。斜面には当初から花崗岩礫が見え隠れしていたが、この斜面の表土を除去すると、さらに多くの礫が検出された。この礫群のうち、E 区平坦面と同レベルでは E 区の暗灰色土に切り込むような状況で、0.3m 前後の礫が平坦面を造っている。これは、この平坦地に入る為に坂の角度を緩くしたようにもみえる。また、SF001 の南端にある礫群は、明らかに人為的に敷き並べていた。これら礫群は、この下層にあたる茶灰色土や黄茶色土などの礫を多く含む崩落土とは大きく異なっていて、腐葉土のような土砂の混入が目立っている。そのほか SX015 東側の礫群については、積極的に人為性は見出せない。しかし、調査で露出させてしまったものの、ここを歩行していた時期は礫の間を腐葉土等が程よく埋まっていた可能性が高い。

E 区から G 区には、傾斜面に茶灰色土を積んで坂道を造っている。その西端上部には大石が 4 個並ん

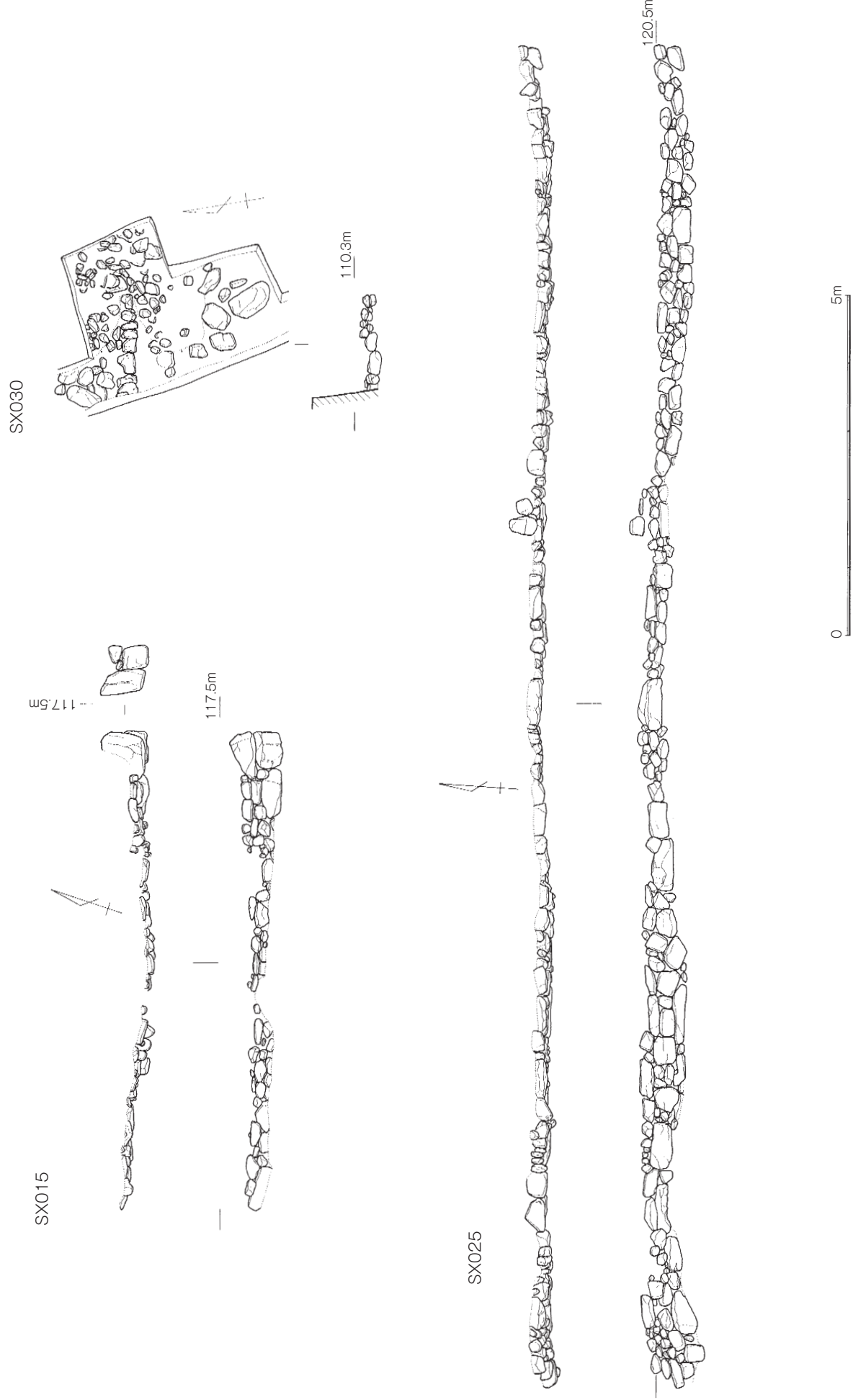


Fig. 7 SX015・025・030 遺構実測図 (1/80)



Fig.8 SF001 遺構実測図 (1/80)

でいて、SX025の東端の石に直行している。SX025と交差する部分は、幅1mほどの範囲で花崗岩の平坦面を意識した積み方がなされ、およそ3段の段が造られている。このことから、SF001はSX025と同時に造られた可能性が高い。

SX025の東側付近以外は、崩落石の上面を通路として利用する間に、歩きやすいように部分的に礫を並べるなど行った結果が上記のような遺構状況を生み出したものと推測される。さらに約 $14^{\circ}50'$ の傾斜であるため、降雨後など滑りやすい地盤にとって礫群は歩行上都合が良かっただろう。

この通路については、地権者は全く記憶になく、その存在すら知らないという。

F区 (Pla. 10)

SX025の石垣の基盤面で、東端には通路(SF001)がある。南側の法面には石垣はない。地盤には花崗岩礫が含まれる黒灰色土で、G区の基盤下層の延長上にあり、G区が盛り土であることと、F区が堆積地盤であること、E区がF区の地盤をカットして造成されたことが理解できる。幅は0.6mほどで目立った利用状況は窺えない。E区とG区の高差2.8mを考慮し、G区の地盤崩落防止のために設けられた段造成と推測される。また、東端のSF001近くでは平坦面がなくなっている。SX025はギリギリのところまで積まれていることから、造成後何らかの理由で削平されたものと推測される。

G区 (Fig. 10、Pla. 12・13)

この平坦地は戦後すぐまで水田で、その後イチョウを植えていたが、強剪定で高くならなかったため、杉を植林し現在に至っているという。地盤状況を見ると、表土の茶灰色土の下に0.15m程の厚みで暗灰色土があり、その直下に黄褐色土で礫を多く含んでいる。暗灰色土はG区が水田だった頃の耕作土とみられる。北側では暗灰色土直下だった黄褐色土が、G区中盤付近から南に向かって傾斜していく。南半分には黄褐色土上に黒灰色土が覆い、段造成される直前の表土と推測される。黒灰色土はF区の表土であり、E区でカットされていて、造成前が南に向かう緩斜面であったことを物語っている。当初緩斜面だった南半分は、黒灰色土上にSX025の石垣を築き、最大1.5mほど黄茶色土などの盛土を行い、G区の平坦面を造り出している。

SX025 (Fig. 7、Pla. 10・11)

調査前には僅かに石垣が露出していただけで、殆どが土砂に覆われていた。地権者もこれだけ明瞭な石垣が存在したことを知らなかった。西側は川の浸食で消滅している。検出長19.7m、高さ0.3～0.8mで3段前後の礫が積まれている。中央より西側にやや大きな石を積んでいる。石垣の裏側に石は見られるが、積極的に裏込め石は見られない。東側のSF001に近い部分では、石垣上部の法面に礫が多くみられるが、盛り土中に意図的に入れたものかは明確でない。

東端はやや湾曲し、SF001の通路状の登り坂と接していて、面を揃えていた石垣とは異なる石積みとなっていて、SF001との区別は明瞭である。

H区 (Fig. 10、Pla. 14・15)

G区との高低差は2m程あるが、法面に石垣はない。近年ここへの登り下りは川沿いの所を適当に行っていたというが現在は崩落し存在しない。平坦面では調査前から花崗岩礫が散在していて、礎石建物の可能性も考えられたが、最近の枯葉に載っているものが多く、転石であることがわかった。地権者の知りうる限り、戦後この部分は礫の多い土地ということでI区同様全く土地利用がなく、放置された部分であったという。



Fig. 9 SX035 遺構実測図 (1/50)

この平坦面はI区と同様に砂質土が上面を覆っている。その下層には耕作土のような灰茶色土が見られるため、耕作地が土砂堆積によって、いつしか放置されるに至ったものと推測される。

I区 (Fig. 10、Pla. 14)

調査地の谷間の最上段に位置し、三角形の平坦面を形成している。これより北側は0.2m前後の花崗岩礫の堆積層が斜面に露出している。土層堆積をみると、I区の地盤は最上面の砂質土のほか、暗灰色土や砂礫層によって形成されている。H区とは0.7m前後の段差が存在するが、その傾斜面に目立った構築物はなく、地盤の土層を観察すると、深さ0.5m付近に0.5m前後の大きな花崗岩礫を含む砂礫層があり、それら大石がダム状に堆積することによって、地表面の段差を作り出しているように思われる。

集石遺構

SX035 (Fig. 9、Pla. 15)

この谷に造られた段造成の中で最も奥に位置する。調査前から殆ど露出していた。集石範囲は東西4.2m、南北3.2mで、大きさ0.1m～0.6m前後の花崗岩礫が広がっている。I区の土層堆積状況からみると、最上面の暗灰色砂質土に含まれ、露出している状況である。

この集石範囲以外では花崗岩礫が同じレベルであまり確認できないこと、上部の崩落石と異なり、傾斜した堆積ではなく、比較的上面が平坦になっていることなどから全てが自然堆積とは言いがたい。しかし、集石内に土坑や遺物は全く確認できない状況では、人為的な構築物とみるより、耕作時に邪魔な礫を集めた場所など消極的な人工物と考えた方が適当であろう。しかし、戦後H・I区の土地利用がなかったことから、それ以前のものということになる。

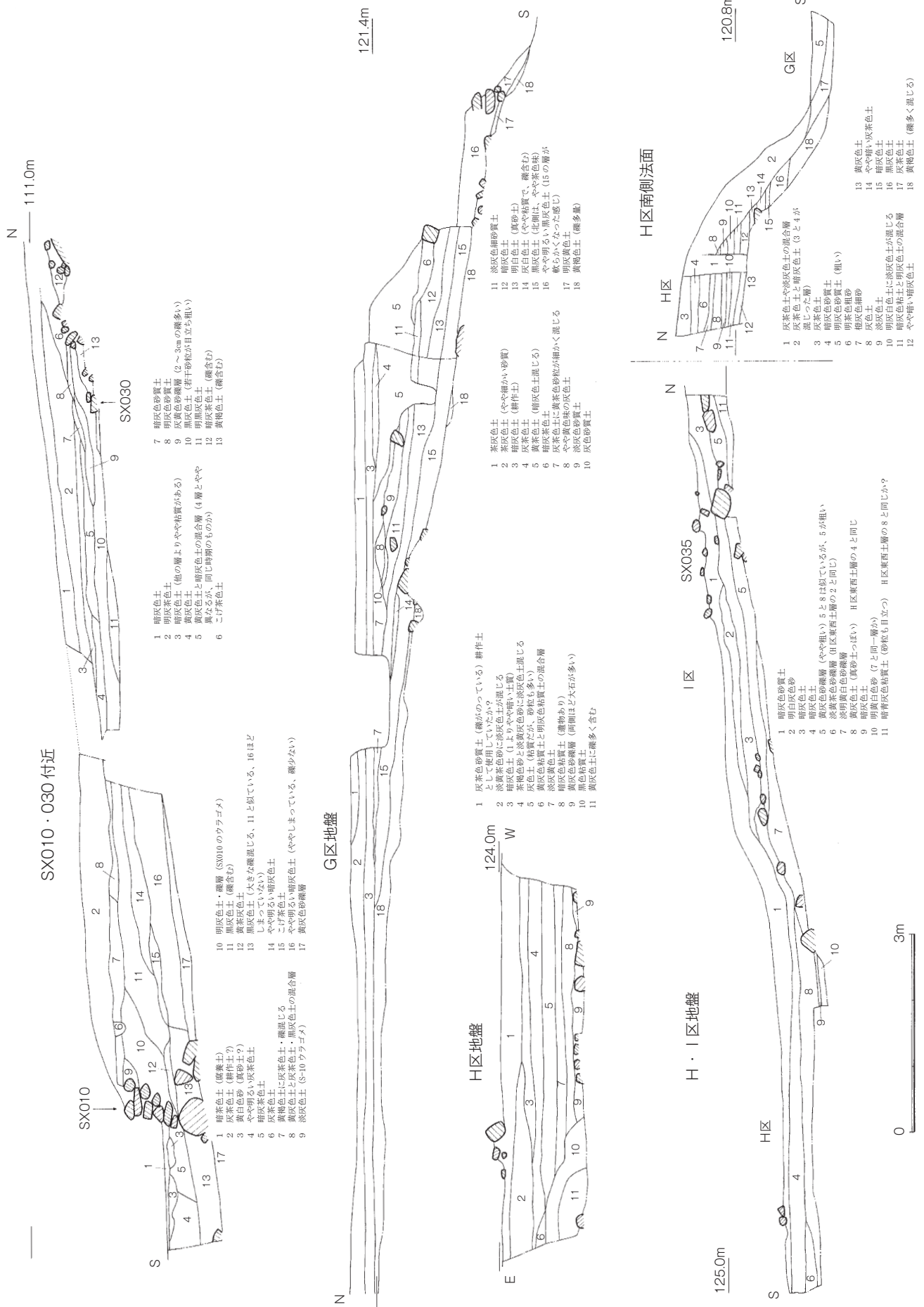


Fig. 10 調査地土層実測図 (1/80)

(3) 出土遺物

遺物は殆ど確認できなかつた。ここに掲載したものは、形状が確認できる遺物全てである。

B 区

茶灰色土出土遺物 (Fig. 11、Pla. 17)

石製品

剥片 (1) 大きさは $1.9 \times 0.95 \times 0.4$ cm。黒曜石製。

表土出土遺物 (Fig. 11、Pla. 17)

国産陶器

七輪 (2) 七輪の棧で、径 1.8cm ほどの円孔が作られている。内外面とも丁寧にナデられているが、図の表面の方がやや表面が粗い。色調は暗茶色や茶橙色を呈する。

C 区

黒灰色土出土遺物 (Fig. 11、Pla. 17)

石製品

石核 (3) 大きさは 3.45×3.4 cm、厚さ 1.4cm。2 面ほど自然面が残っている。色調は暗灰色で、若干風化している。安山岩。

表土出土遺物 (Fig. 11、Pla. 17)

国産陶器

播鉢 (4) 底部付近の破片で、外面はヨコナデ、内面には細かい播り目が交差し、使用によって研磨され滑らかになっている。底部外面もやや播れている。色調は外面と断面が灰茶褐色で、内面は淡灰色を呈する。胎土は精製されている。

D 区

黄茶色土出土遺物 (Fig. 11、Pla. 17)

須恵器

坏蓋 (5) 上半部の破片で、外面は上部が回転ヘラケズリ、下半は回転ナデ。内面は上部が不定方向のナデ、下半は回転ナデである。焼成良好だが、還元は不良で暗茶灰色を呈する。

坏 (6) 体部の破片で、口縁部が僅かに外反する。内外面とも回転ナデ。胎土は白色細砂粒を多く含む。焼成良好だが、還元は不良で茶灰色を呈する。

坏 c (7) 復元高台径 10.0cm。外面底部は回転ヘラ切り、内面底部は回転ナデのあと不定方向のナデ。胎土は 0.5mm ほどの白色砂粒を含む。焼成・還元は良好で、色調は淡灰色を呈する。

壺×鉢 (8) 底部付近の破片で、全形が掴めない。底部外面はヘラ切り未調整。外面は底部近くが回転ナデで、その上がナデ。内面は回転ナデ。胎土は白色細砂粒を少量含む。焼成・還元は良好で、色調は淡灰色を呈する。

E 区

茶灰色土出土遺物 (Fig. 11、Pla. 17)

土師器

小皿 a × 坏 a (9) 底部切り離しはヘラ切りで、体部は内外面とも回転ナデ調整。胎土は細かい黒色粒を含んでいる。色調は淡黄白色を呈する。

国産磁器

仏飯器 (10) 脚部付近で、復元底径 5.2cm。坏部と脚部中位まで灰白色の透明釉を施釉し、下半は露胎。胎土は淡灰白色を呈する。底部には回転糸切り痕が残っている。

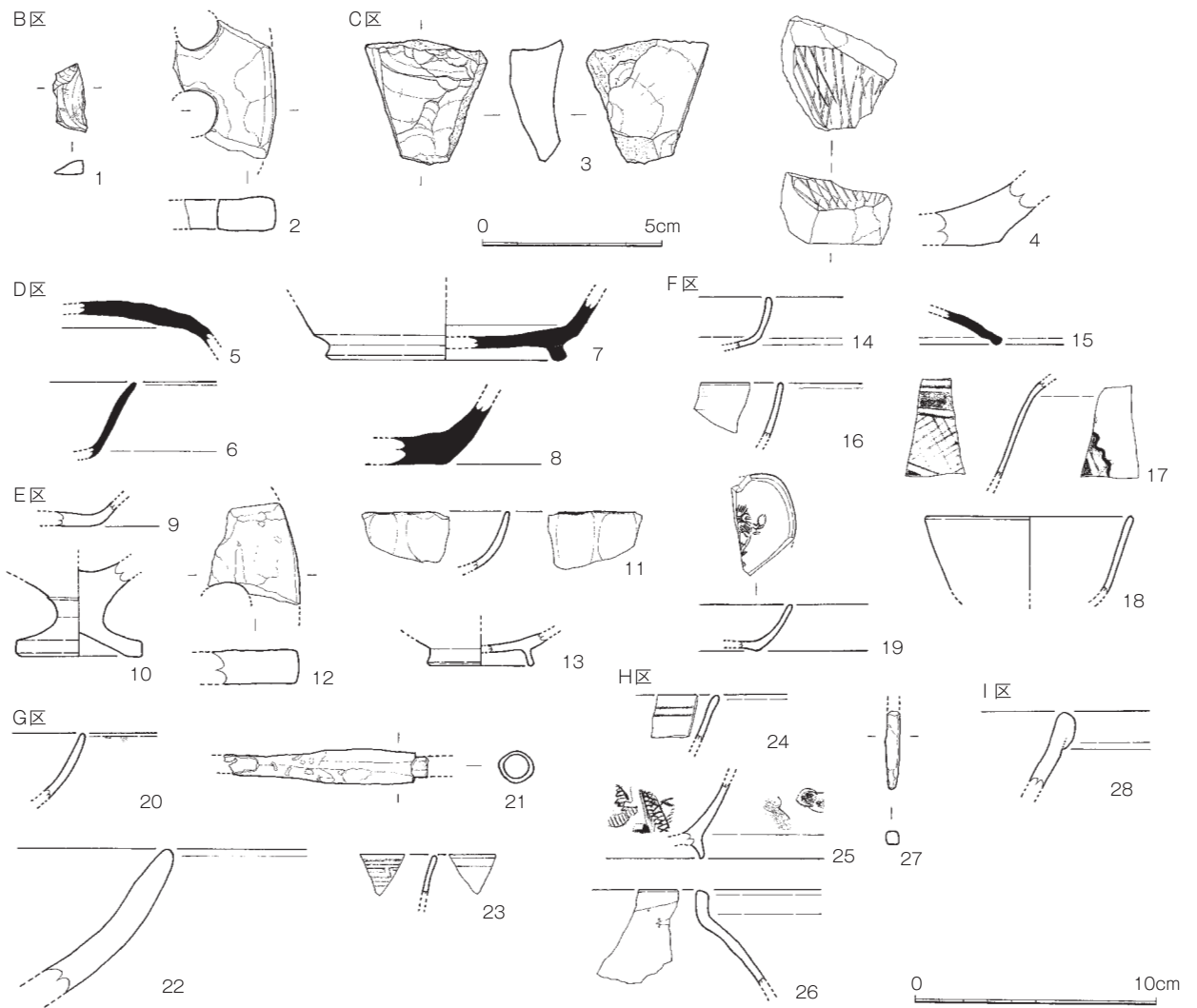


Fig. 11 大原遺跡第2次調査出土遺物実測図 (1/3、1と3は1/2)

椀 (11) 内外面とも灰白色の透明釉を施釉する。口縁部内面と内面底部付近に明るい藍色を施す。

国産陶器

七輪 (12) 七輪の棧部分。胎土は1mm以下の白色砂粒を少量含み、色調は淡茶灰色を呈する。内外面ナデだが、片面は若干荒れている

表土出土遺物 (Fig. 11)

国産磁器

椀 (13) 復元高台径4.4cm。高台畳付は露胎、それ以外は灰白色釉で施釉される。外面には粗い貫入がみられる。

F区

灰茶色土出土遺物 (Fig. 11、Pla. 17)

土師器

皿b (14) 口縁端部を僅かに内湾させる。全体的に摩滅している。胎土は精製されているが、黒色粒が多くみられる。色調は淡橙茶色を呈する。

表土出土遺物 (Fig. 11、Pla. 17)

須恵器

蓋3 (15) 口縁端部で端部を僅かにつまみ出している。内外面とも回転ナデ。焼成・還元とも良好で、

色調は暗灰色を呈する。

肥前系磁器

椀 (16) 口縁部で、内面に雷文と圏線が施釉されている。口縁端部は淡茶色を呈する。

椀 (17) 外反する体部の破片で、口縁部近くが外反する。内外面とも呉須で格子や圏線などの文様が施されている。

国産磁器

椀 (18) 復元口径 8.6cm。全面白色の透明釉を施している。

皿 (19) 方形状の小皿になるものとみられ、底部は低い高台状の作りをしている。やや黄色味を帯びた白灰色を呈し、若干くすんだ色調をしている。内面底部には朱色や緑色で草花文を描く。

G 区

灰色土出土遺物 (Fig. 11、Pla. 17)

国産磁器

椀 (20) 胎土は白灰色で、内外面ともやや黄色味を帯びた灰白色釉を施す。外面に薄い青色釉が見られる。

金属製品

煙管雁首 (21) 端部が欠損するが、雁首部分と考えられる。現存長 5.65cm、径 0.95 ~ 1.0cm。全体的に青緑色に錆びている。断面部分には木質が残っている。

黄茶色土出土遺物 (Fig. 11)

土師器

浅鉢 (22) 鉢のような形状になると推測される。胎土は 5mm 以下の白色砂粒を多く含み、全体的に粗く調整は不明。焼成はやや不良で灰橙色を呈する。土師器としたが胎土の状況から弥生土器や古式土師器の可能性も考えられる。

肥前系磁器

椀 (23) 内外面とも白色の透明釉で、内面には呉須で雷文を、外面には圏線を施している。

H 区

灰茶色砂出土遺物 (Fig. 11)

肥前系磁器

椀 (24) 口縁部の小破片で、内外面とも若干緑灰色を帯びた透明釉を施し、内面には薄い緑灰色で圏線が描かれている。

灰茶色土出土遺物 (Fig. 11、Pla. 17)

肥前系磁器

椀 (25) 底部付近で、胎土は白色で透明釉を施釉し、内外面に鮮やかな呉須で文様を施す。

国産陶器

壺 (26) 短頸の壺で、胎土は粗く 1mm 以下の白色砂粒を多く含み、茶褐色を呈する。口縁端部を除き、内外面には光沢のある茶黒色釉を施す。

金属製品

鉄釘 (27) 先端付近で残存長 2.15cm、断面は 0.45 × 0.35cm の方形である。

I 区

灰茶色砂出土遺物 (Fig. 11)

国産陶器

鉢(28) 玉縁状の口縁部で、胎土はやや粗く、5mm以下の白色砂粒を少量含んでいる。色調は茶褐色を呈する。内面には暗茶褐色釉が薄く施されている。

5、総括

今回の調査の主な所見や調査地の聞き取り等を列挙すると以下のとおりである。

- ・ 調査で確認した最下層で黄茶色土層は多くの礫に混じって、僅かに8世紀代の遺物を含んでいる。
- ・ 調査区全体として遺物は少ない。
- ・ ピットや礎石などの建物に関する遺構は確認されていない。
- ・ SX025とSF001は同時に造られたと推測される。
- ・ 現在493・494・495番地と492・498-1番地は前者が杉の造林、後者がツブラジイ林になっていて、その境界部分でSX010・025の石垣が途切れ、その東側にSF001やSF020が存在する。
- ・ 地籍図ではC・D区を横切るように里道が通り、現状でも杉林の中に確認することができる。現在の地権者もG区に昭和30年代までであった水田にはこの里道を通っていたといい、それ以外の所は、他人の土地ゆえに通行しなかったと言われている。現在でもこの土地に行くには、自宅横から続くこの里道を通って行くという。
- ・ SX010の下に続く段造成は、戦後すぐまで水田で、ここにはその下にある水路脇を通って登ってきた。よって、里道から下りることはあまりなかったという。
- ・ G区は昭和30年代まで田で横の川から水を引き込み、E区へと水はかかっていたという。
- ・ 地権者によるとH・I区は礫が多いため、昭和に入ってから全く土地利用をしていない。
- ・ 地権者はSF001の存在は全く記憶にないことやSX010の南北石垣やSX025が明瞭な石垣であったことを把握していなかった。
- ・ C・D区の西側については、段造成地でありながら、南北に緩やかな傾斜地である。
- ・ 地権者はSX030の石垣の存在は全く知らなかった。
- ・ 調査対象地外の段造成でも、法面に石垣が見え隠れしている。
- ・ 昭和37年撮影の航空写真で見ると、この谷は調査区南端部から東に曲がり、大原集落方面に開けていて、調査地同様に段々に田圃が続いている。この状況は現在でも確認できる。

以上のことから、この土地の変遷をまとめると、元々四王寺山裾に形成された小規模な谷地形であったが、ある時期に8世紀代の遺物を含む土砂堆積で大きく埋まり、その後小規模な土砂堆積があったと推測される。そして、近世になって、この地を開墾するにあたり、谷と直角に石垣を築き、傾斜地の高い方(北側)をカットし、その土で南側に盛土を行って平坦面を造り出す段造成を谷全体に行っている。そして、谷の東端に幅1.5m程の通路を設けている。この通路は谷筋に沿って大原集落に向かって続いていた可能性が高いが、現状ではSF020以南に及んでいたかは不明である。SX005以外の石垣の殆どは最初の開削時のものと推測されるが、SX030の存在からC・D区西側のなだらかな平地については埋没して確認できない段造成や石垣が存在する可能性がある。その後、理由は不明だが、東側に設けた通路は、昭和時代に入った頃にはその存在が分からなくなっており、代わりに現在も残されている里道が使われるようになったと考えられる。土地の利用も昭和30年代を最後に水田として利用はなくなり、一部は杉やヒノキが植えられた。A・B区については、等高線でも分かるように元々北側と同じような緩斜面であったところを削平し、A区下と合わせて3段の平坦地を造成したが、まもなく藪や荒廃地になり、

現在に至ったと推測される。

以上のとおり、調査箇所では、人が住んだ痕跡は全く確認できず、幅 25m 程の南北に細長い耕作地として開墾されたことがわかった。宝満山以外の土地で、山間部の発掘調査は少なく、山間部の土地利用の変遷を知る上で貴重な成果を得ることができた。

表 1 大原遺跡第 2 次調査遺構一覧表

| S 番号 | 遺構番号 | 種 別 | 時 期 | 地区番号 |
|------|-------|-----|-----|-------|
| 1 | SF001 | 通路 | 近世～ | D～F 区 |
| 5 | SX005 | 石積み | 現代 | B 区 |
| 10 | SX010 | 石垣 | 近世～ | C 区 |
| 15 | SX015 | 石垣 | 近世～ | E 区 |
| 20 | SF020 | 通路 | 近世～ | C 区 |
| 25 | SX025 | 石垣 | 近世～ | F 区 |
| 30 | SX030 | 石垣 | 近世～ | C 区 |
| 35 | SX035 | 集石 | 近世～ | I 区 |

表 2 大原遺跡第 2 次調査 出土遺物一覧表

| 表土 (B 区) | | 灰茶色土 (G 区) | |
|------------|-----------------|------------|---------|
| 肥前系陶磁器 | 破片 | 土 師 器 | 坏、破片 |
| 国 産 陶 器 | 七輪 | 肥前系陶磁器 | 椀、小皿、破片 |
| 瓦 類 | 破片 | 国 産 陶 器 | 甕、破片 |
| 茶灰色土 (B 区) | | 灰色土 (G 区) | |
| 土 師 器 | 破片 | 土 師 器 | 坏 a、破片 |
| 石 製 品 | 剥片 (黒曜石) | 国 産 磁 器 | 椀 |
| 表土 (C 区) | | 茶灰色土 (G 区) | |
| 国 産 陶 器 | 播鉢 | 金 属 製 品 | 煙管 |
| 茶灰色土 (C 区) | | 黄茶色土 (G 区) | |
| 土 師 器 | 破片 | 土 師 器 | 鉢? (古代) |
| 黒灰色土 (C 区) | | 国 産 陶 器 | 七輪 |
| 石 製 品 | 剥片 | 表土 (H 区) | |
| 黄茶色土 (C 区) | | 土 師 器 | 坏 a、破片 |
| 土 師 器 | 甕 | 国 産 磁 器 | 壺? |
| 黄茶色土 (D 区) | | 瓦 類 | 燻し瓦 |
| 須 恵 器 | 蓋、坏、坏 c、壺?、鉢 | 灰茶色砂 (H 区) | |
| 表土 (E 区) | | 須 恵 器 | 破片 |
| 国 産 磁 器 | 小椀 | 肥前系陶磁器 | 破片 |
| 茶灰色土 (E 区) | | 国 産 陶 器 | 破片 |
| 須 恵 器 | 坏 | 国 産 磁 器 | 破片 |
| 土 師 器 | 坏 a、破片 | 瓦 類 | 燻し瓦 |
| 国 産 陶 器 | 七輪、破片 | 金 属 製 品 | 鉄釘 |
| 国 産 磁 器 | 仏飯器 | 暗灰色土 (H 区) | |
| 瓦 類 | 丸瓦 (無文)、破片 (無文) | 須 恵 器 | 破片 |
| 表土 (F 区) | | 土 師 器 | 椀 c、破片 |
| 須 恵 器 | 蓋 3 | 灰茶色砂 (I 区) | |
| 土 師 質 土 器 | 破片 | 土 師 器 | 甕 |
| 肥前系陶磁器 | 椀、皿、破片 | 国 産 陶 器 | 甕、破片 |
| 国 産 陶 器 | 破片 | 瓦 類 | 燻し瓦 |
| 瓦 類 | 燻し瓦 | | |
| 灰茶色土 (F 区) | | | |
| 土 師 器 | 皿 b | | |

写真図版

調査前風景
SF020・SX010
を望む（南から）



調査前風景
SF001・SX015・025
を望む（南東から）



調査前風景
SF001 付近から SX025
を望む（南東から）





A区完掘状況（北東から）



SX005 全景（南から）



B区全景（北から）



SX010・SF020 全景（南東から）



SX010 東西石垣状況（南から）



SX010 南北石垣状況（東から）



SX010 裏込め状況（北から）



SX010 付近堆積状況（南東から）



SX030 検出状況（西から）



SX030 検出状況（南西から）



C・D区礫群検出状況（南から）



SX015・SF001 検出状況（南東から）



SF001 検出状況（南から）



SF001 検出状況（北から）



SF001 北側検出状況（南から）



SF001 北側盛土除去後状況（南から）



SX025 検出状況（東から）



SX025 西側検出状況（南から）



SX025 中央付近検出状況（南から）



SX025 東側検出状況（南から）



G区全景（北西から）



G区南側地盤状況（南西から）



G区北側地盤状況（北西から）



G区南側法面・SX025裏側地盤状況（南西から）



H・I区全景（南東から）



H区南側法面地盤状況（南西から）



H区地盤状況（南東から）



SX035 検出状況（南東から）



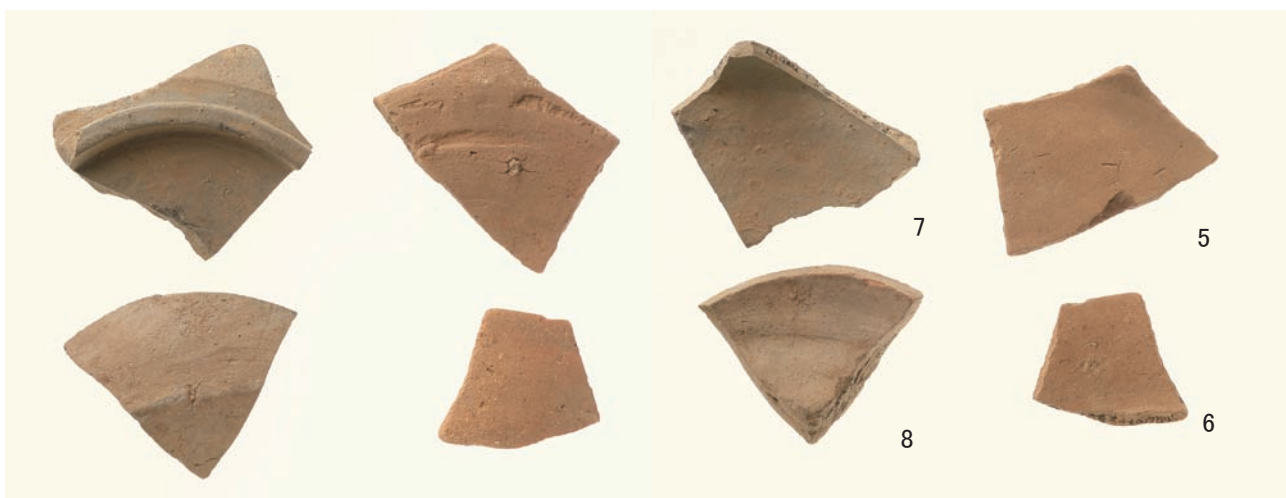
調査地遠景（南から）



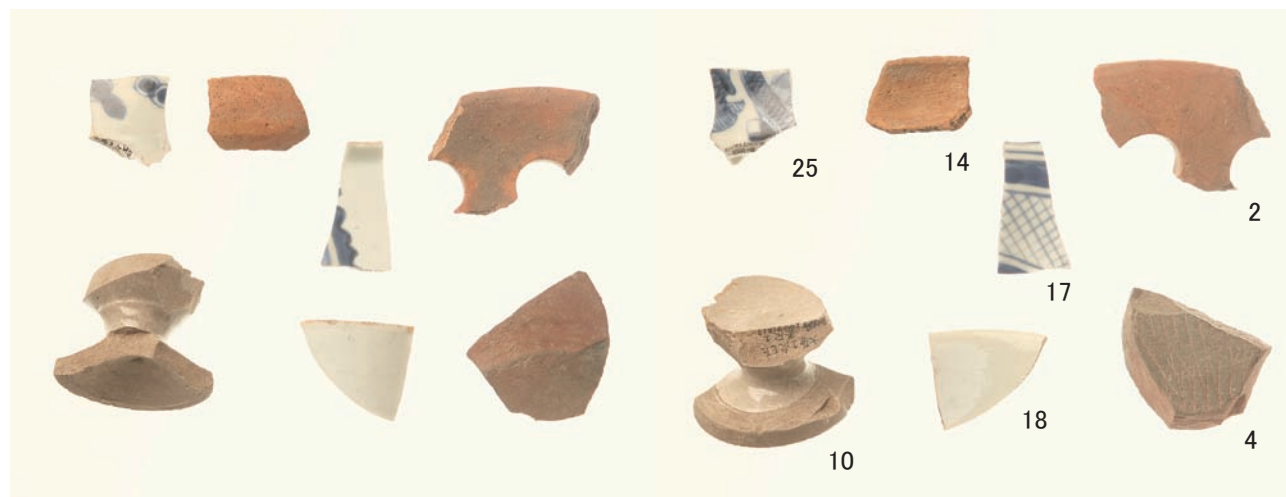
調査地（G区）西側の沢（北から）



C区 黒灰色土出土石製品



D区 黄茶色土出土遺物



その他の出土遺物



21 G区 茶灰色土出土煙管

報告書抄録

| ふりがな | おおばるいせき 1 | | | | | | | | | |
|-----------------------|--------------------------|-------------|--------|--------|------------|-------------|----------|----------|------------------------|--------|
| 書名 | 大原遺跡 1 | | | | | | | | | |
| 副書名 | 大原地区治山ダム建設に伴う調査 | | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 太宰府市の文化財 | | | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 102 集 | | | | | | | | | |
| 編著者 | 宮崎亮一 | | | | | | | | | |
| 編集機関 | 太宰府市教育委員会 | | | | | | | | | |
| 所在地 | 福岡県太宰府市観世音寺 1 丁目 1 番 1 号 | | | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2008 (平成 20) 年 3 月 31 日 | | | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | 条坊 【鏡山推定案】 | ふりがな 所在地 | コード | | 座標 | | 調査期間 | | 調査面積 m ² | 調査原因 |
| | | | 市町村 | 遺跡番号 | X | Y | 開始 | 終了 | | |
| おおばるいせき 大原遺跡 第 2 次 | 条坊外 | 太宰府市 太宰府 | 402214 | 210186 | 59119.1691 | -42944.0228 | 20070911 | 20071225 | 1040 | 治山ダム建設 |
| | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | |
| 所収遺跡名 | 遺跡種別 | 時代 | 主要遺構 | | 主要遺物 | | | 特記事項 | | |
| 大原遺跡 第 2 次 | 段造成 | 近世～ | 石垣、通路 | | 陶磁器 瓦 | | | | | |

太宰府市の文化財 第 102 集

大原遺跡 1

—大原地区治山ダム建設に伴う調査—

平成20(2008)年3月

編集・発行 **太宰府市教育委員会**
太宰府市観世音寺 1-1-1

印刷 **有限会社 システム・レコ**
福岡市東区土井 1-11-21